



ヨーロッパで「自然」といえばまず第一に森を意味する。オーストリアやスイスのように、まったく海に面していない国の場合はいうまでもなく、ドイツのように国土の一部にしか海岸線をもたない国でも、「自然」と「森」はほとんど同義語である。多くの文学作品においても、ヨーロッパの人びとの「自然」に対する諸々の感情、すなわち畏怖や不安や愛情や共感、海でもなく、川でもなく、まさに「森」への想いとして具体化されている。ところで、ここにひとつの疑問が生じる。ヨーロッパの「人びと」といっても、女性と男性では、「自然＝森」に対する考え方や、「自然＝森」に対する感情に違いはないのかという疑問である。われわれが「人」という場合、たいていは中性的な人間を想定しているわけだが、「人」を中性化することによって抜け落ちてしまうものはないのだろうか。今回の総合テーマ「森と人と文化」をジェンダーの視点から、すなわち生物学的な性差ではなく、あくまでも社会的、文化的な性差の視点から考察するとどうなるのか、これが私の研究のテーマである。結論を先取りしてしまえば、「自然」と「文化」に対峙するときの女性と男性の立場には大きな違いが存在する。それはどのような違いなのか、なぜそのような違いが生まれたのかを、まず最初にある小説を手がかりに、以下において考察したい。

1983年のことである。マルレーン・ハウスホーファーというオーストリア人女性作家の手になる一冊の長編小説『壁』が、ドイツ語圏で大きな反響を呼んだ。爾来、ドイツ語圏で版を重ねただけではなく、外国語へも翻訳され、日本でも1997年に同学社から翻訳版が出るほどの、幅広い人気を博している。¹

小説の筋はいたって簡単である。都会に住む一人の中年女性「私」が、従妹夫婦と三人で休暇を過ごすために、山奥の狩猟小屋を訪れる。ところがその夜、食事のために谷に下りた従妹夫婦が、翌日になっても戻らない。不安になった主人公は、二人を探しに出かけるが、その途中、ガラス質の透明な壁にぶつかって、一步も前に進めなくなる。驚いたことに、たった一夜のうちに、壁の向こうでは人間も動物もことごとく死滅し、狩猟小屋周辺の比較的広範囲の山岳地帯だけが、突然出現した謎の壁にぐるりと囲まれることによって、破滅を免れていたのである。救助される見込みがないことを悟った彼女は、同じく壁のなかに残された犬、猫、牛とともに、たった一人で、生きぬくための方法を模索する。そして子供の頃、田舎で多少習い覚えた経験をもとに、試行錯誤を繰り返しながら、畑の開墾、じゃがいもと豆の植えつけ、搾乳、狩猟などの労働に励む。つまりこの小説は、まるでロビンソー・クルーソーのように苛酷な自然のなかで懸命に生きぬく中年女性の姿を克明に描写することによって、多くの読者を獲得したのである。壁の向こうで何が起こったのか、壁の正体は何なのか、謎は最後まで明かされないが、主人公自身は、どこかの大国が秘密兵器によって人類を破滅させたのだらうと推測している。

この小説は、じつは1960年に初版が出ている。1983年に公刊されたのは復刻版である。初版が出た当時は、まだ中性子爆弾も存在しておらず、現在ほど環境問題が地球規模の課題となっていなかったせいか、冒頭のSF的な舞台設定に現実味がないと批判され、それほど注目されずに終わってしまった。ところが20年後には、ドイツにおける「緑の党」の

結成に端的に表れているように、経済効率を第一に考える近代科学への批判が声高に叫ばれるようになり、人びとの環境問題への関心も日増しに強まっていた。今度は、小説『壁』のもつ近代科学批判、男性社会批判が多くの支持を受けたのである。

この小説は、第一に西欧における「都市」と「自然」の対比について考察するさいに、第二に女性と自然の関係を考察するさいに、重要な鍵を提供してくれる。しかし問題に立ち入るまえに、西欧の都市の特徴を確認する必要があるだろう。ヨーロッパには、現在でも中世の都市の景観を、多少程度の差はあるものの、当時のまま残した町がいくつも存在する（トレド、ルッカ、ローテンブルク等々）。それらの町の地図や航空写真を見ると、城壁にぐるりと取り囲まれた空間のなかに、通りと建物が整然と並んでいる。城壁はもちろん外からの攻撃にそなえて、当時としては最先端の軍事科学に基づいて設計された頑丈な要塞である。と同時に、その幾何学的な美しい抽象文様は、建築家たちの心を魅了してやまなかった。ルネサンス時代には、レオナルド・ダ・ヴィンチもミケランジェロも、要塞のための設計をおこなっている。そのいかにも人工的な円形あるいは星形の都市空間は、秩序と理性と文明の象徴として、野性的な自然の混沌に、真っ向から対立している。

西欧における近代化の歩みは、自然＝森を切り開き、開墾し、都市化していく過程だったといえる。そのさい「都市」対「自然」という対立の図式は、日本の場合とは異なり、ひじょうに明確だった。たとえば高橋義人は両者の対立についてこう書いている。「自然を排除して人工的につくられた都市。このような都市の構造は、西欧の都市に最も端的に表れている。中世においてつくられた西欧の都市は、市壁ないし城壁によって囲まれていた。市壁の内側に自然を侵入させてはならない。そう考えたヨーロッパの人々は、市壁の外側に広がる自然と長年にわたって戦いつづけてきた。市壁の外側に広がる自然。それは森と耕作地だった。むろん耕作地は都市に住む住民にとって欠くことができない。そして耕作地をさらに広げるためには、森の木々を伐採し、そこを開墾しなければならない。こうして森は都市文化の住民にとって戦うべき敵となった」。²

西欧文明の歩みが、自然＝森を駆逐して耕作地に変え、都市化してゆく過程であったとしたら、その歩みは、人間の主体性の確立という観点からみた場合、人間の理性が自然を支配する啓蒙のプロセスに相応する。人間は、科学や技術によって自然を客体化し、自然を支配すると同時に、道徳や教育によって自己の内面を啓蒙し、主体としての自己を形成する。つまりホルクハイマー／アドルノの言葉をかりれば、「外なる自然」と「内なる自然」を支配し抑圧することで、文明化をおし進めてきたのである。しかし「主体性」の原理が「自然支配」に求められるとしたら、ここで問題になるのは、その自然支配をめぐる男性と女性の違いである。『啓蒙の弁証法』のなかでホルクハイマー／アドルノはこう言っている。「この文明を築いてきた営々たる努力に対して、女性は自立した形では関与していない。男は外に出て敵と戦って生き、活動し努力しなければならない。女性は主体ではない。〔中略〕女性にとって、男性から強制的に割り当てられた分業態勢は、有利なものではなかった。女性は生物学的な機能を体現し、自然を象徴するものとしてイメージされたが、この自然を抑圧することによってこそ、この文明に栄ある称号が授与されているのである。はてしなく自然を征服し、調和にみちた世界を無限の狩猟区に変えることが、数千年にわたる憧れの夢だったのだ。男性社会における人間の理念は、この夢に添ったものだ。これが人間が鼻にかけてきた理性の意味だったのだ」。³

このように自然支配をめぐる男性と女性の立場の違いは明白である。男性はつねに、自然への命令者として、自然を支配する理性の側にいる。ところが同じく人間である女性の立場は、男性の場合ほど一義的ではなく、むしろ曖昧である。女性は、生物学的な機能を体現しているという理由で、往々にして自然と同一視される。だが女性は、文明化の過程にまったく参加しなかったわけではなく、男性の協力者として、文明化のプロセスを絶えず補完する形で、文明化にかかわってきた。この場合女性は、理性を持たないわけではないものの、男性に比べて、わずかしかな自然を克服していない、男性より自然に近い存在、自然と理性の中間的存在とみなされる。つまり女性は、自然と同一視されるか、そこまでゆかなくても、自然に近い存在とみなされることによって、自然に対する自己の優越性を主張する男性＝理性によって、自分より劣った支配の対象として位置づけられるのである。シェリ・B・オートナーもこう言っている。「女性の汎文化的な従属的地位は、男性が文化と同一化されるのに対し、女性が自然と同一視されたり、象徴的に自然と関連づけられたりしていると仮定することによって、簡単に説明がつけられるであろう。自然を包含し、調節することが文化の常なる企画であるため、女性が自然の一部であると考えられるなら、文化は女性を抑圧するとはいわないまでも、従属させることを＜自然＞なこととみなすのである」。⁴ 実際には、女性は男性より自然に近いわけではない。どちらも、ともに生殖にかかわり、ともに死すべき存在であり、同じように知性と感情を有している。

さてここでもう一度、小説『壁』に話を戻そう。女性主人公「私」は、寡婦で、二人の娘の母親である。彼女は、壁の向こうで娘たちや知人たちが死んでしまったことに、まったくといってよいほど悲しみを覚えない。むしろ欺瞞に満ちた偽りの過去を払拭できたことに、安堵と満足を感じている。彼女は、女性にとって居心地の悪い「社会」や、女性を性役割によって拘束する「家族」から逃亡し、自然の生活のなかで、あるときは青年に、あるときは子供に、あるときは性を超越した老婆になることで、性役割から解放された多様な生の豊かさを享受している。

一見すると、これは「都会」で失った本来の自己を「自然」のなかで取り戻すという、「都市」否定、「自然」賛美の図式のようにみえる。たしかに、そういう面もあるにはある。しかし、もう少し詳しく観察してみよう。女性主人公「私」には、自然のなかで、東洋的な意味で自然と「共生」しようという姿勢があまり見られない。たとえば彼女は、自然のなかで手に入る野性の植物に注目するまえに、直ちに土地を耕作し、じゃがいもと豆の植えつけを開始する。耕作地にとって、繁殖力に富み、境界線を越えて侵入してくる野性の植物は、ただもう脅威でしかない。また彼女は薬草に何の関心も示さない。一度激しい腹痛に襲われたときも、痛みが消えるまで、ひたすら耐えて過ごしている。動物との関係をも、犬、猫、牛という、人間に飼慣らされた動物だけに囲まれており、狩猟は好きではないと言いながら、銃をかついで狩りに出かけ、野性の動物に特別な親密感を覚えることもない。つまり彼女の生活は、自然との共生ではなく、あくまでも自然との苛酷な「戦い」であって、ときおり描かれる自然のなかの安らぎは、束の間の自然との「休戦」でしかない。壁のなかの彼女の行為は、結局のところ、自然を切り開き、開墾するという「都市化」「文明化」の歩みと重なるのである。この小説の著者ハウスホーファーは、明らかに近代科学批判、男性社会批判の立場に身を置きながら、女性主人公に主体性を確立させるという目的にさいしては、過去において男性がやってきたのと同じように、彼女を

自然と戦わせる以外に方法を見いだせなかったといえる。

透明な謎の壁にしても、一区域をぐるりと取り囲んでいるというその形態は、中世の都市の城壁を思わせる。この小説の著者が、ウィーンで学生時代を過ごしたことを考えれば、旧市街を円のように取り囲む「リング」として当時の市壁の面影を残すウィーンの都市空間が、著者の発想に何らかの影響を与えたのかもしれない。中世の城壁は、前述したように、敵軍の攻撃を阻止するための要塞であると同時に、自然と戦い自然を締め出すための要塞でもあった。そのため『壁』の著者が、主人公を自然と戦わせる場所として、壁に囲まれた空間を思いついたことには、ひじょうに西欧的なものを感じざるをえない。

だが女性の主体の確立をいかにして描きだすかという問題は、ハウスホーファーにかぎらず、すべての女性作家に共通する難問である。ホルクハイマー／アドルノの言うように、「外なる自然」と「内なる自然」を支配することによる人間の主体の確立が、最終的には「内なる自然」の復讐にあって挫折せざるをえないとすれば、男女を問わず各々が、自然への命令者、抑圧者として自然に対峙する姿勢を改め、新たな主体の確立の方法を模索するしかないのではないか。とくに西欧の女性作家にとっては、「言葉」が「理性、秩序、文化」の側に属しているために、女性に与えられた「感情、混沌、自然」という象徴を打破して「言葉」を獲得するためには、今後も数多くの課題を克服していかざるをえないだろう。

今回の研究においては、男性と自然の関係を描いた男性作家の作品を取り上げて、女性作家の作品と比較検討するまでには至らなかった。これは今後の研究に委ねたい。

注

- 1) マルレーン・ハウスホーファー『壁』、同学社、1997年。
- 2) 高橋義人『魔女とヨーロッパ』、岩波書店、1995年、4頁。
- 3) マックス・ホルクハイマー／テオドール・W・アドルノ『啓蒙の弁証法』、岩波書店、1990年、394頁。
- 4) シェリ・B・オートナー「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か？」（エドウィン・アードナー、シェリ・B・オートナー他『男が文化で、女は自然か？』、晶文社、1987年所収）94頁。